

「取手の井野から小堀の分離で消えた村」

取手の井野から小堀の分離で消えた村

大正3年(1914)利根川の大改修工事で分断され、元の流れは古利根沼という三日月湖となっています。

取手町郷土史資料第二集や取手市史余録を見ると、明治の利根川改修の際に消えた集落があるとの記述がありました。大利根橋の近くから元宿、房田という部落がありました。今は堤外や川底に沈んでいます。

房田、大改修をする前、いまの新道地先の河原には、房田(ふさだ、ぼうだ)という部落があったようです。

房田は十戸ばかりの小部落で、大改修の際それぞれに移転させられた。取手には『房田の寄り合い』という言葉があったが、この部落は十戸ばかりの小部落だから「寄合(集会)」には出席率がよく話が早くまとまりそうなものだが、実に相違していつも集まりが悪く、話も仲々まとまらない。そこで取手では、集会を開いても出席が悪いと、『まるで房田の寄り合いみたいだ』と笑ったという。(取手町郷土史資料集)

元宿、一部が河川敷になった地区に元宿(もとじゅく)がありました。元宿では現在の土手を作るため、その一部が内務省に買上げられ、何軒かの家が破壊対象になりました。八坂神社西側の道を河原に向かって土手を越し、川に向かって行く途中に買上げられた人達の家があったようです。(取手市史余録)

十二竈、大改修により、取手の発祥の地ともいべき染野家が住んだ部落跡も水底に没し、いまは『十二竈(まど)』という地名を残すのみとなりました。

十二竈の『まど』は『かまど』の訛ったもので、『かまど』は戸、または軒と同義語で、いずれも家の数をあらわします。すなわち、『十二竈』といわれるところには、十二軒の家があったわけです。この十二竈部落の鎮守は稲荷社で、十二竈が河底に没するとき台宿の東福院境内に移されたそうです。

取手町郷土史資料集を読んで見ますと、利根川改修の際十二竈はすでに集落はなく、地名だけ残っていたような印象を受けます。※ 台宿の東福院は、現台宿坂上のチューリップ幼稚園から谷地の不動堂辺りまで境内であったそうで真言宗高野山派、不動堂は境内にあったもので廃寺の為不動堂も現存しません。



竹村河岸という、取手で一番新しくできた河岸があったそうです。

深川からやって来たアウトロー

土浦の医師佐賀純一の著「浅草博徒一代」に、小堀の様子が記載されているので紹介します。

ドクター佐賀は、この著書で全世界に知られている。

数年前の冬のことだった。私の診療所に、背の高い肩幅のがつしりした老人がたずねてきた。顔が普通の人よりひとまわり大きく、額には黒いしわが深々と切れ込み、分厚い唇は紫色、目玉は汚い黄色味を帯びて、見るからにひと癖ある、といった人相をしている。

裸になつてもらうと、背中一面に刺青が彫つてある。「龍に牡丹」の彫物だが、寄る年波に色は褪せ、龍のうろこは雲のように淡く、髭はほとんど消えかけている。けれども絵柄は一種独得で、妙に心誘われるものがある。牡丹の花びらのなかに女がひとり立っている。龍は、牡丹もろとも女を飲み込もうとしている。女は目を半眼に閉じて合掌しているのだが、その唇にはいわく言いがたい微笑が浮かんでいる。ヤクザ刺青は日本国民にとって暴力と威圧の象徴で許せない。

私は、できることなら写真を撮りたいと思った。

しかしその男とは初対面であるし、それにその悠然たる態度になんとなく気後れして、とうとう写真のことは言い出せなかったのである。

腹を診察すると肝臓が肥大している。

腹水がたまっているのかはつきりと分かる。

私は、男が診察台から身を起すのを待って、言った。

「総合病院に紹介しますから、そこで治療を受けたいらいでしょう」とすると男はかすかに笑つて、

「先生、わたしは七十三になりました。この年になるまで好き勝手なことをやってきたんです。今更、治ろうなんて考えてはいませんよ」

口の中が煙草のヤニでひどく黒く、まるで底のない穴のように見えた。

男は、低いしわがれた声をしていた。

「若い頃、少々無茶をやりましてね、この年になって体が動かなくなつた。それで賭場は子分に譲つて田舎へ引つ込むことにしたんです。土手の下に按摩（あんま）がいるでしょう。わたしは二、三度揉んでもらいましたが、ちよつとした腕ですよ。わたしはあの按摩にすすめられて来たんです」「そうでしたか」

「誰が診たつて、わたしの病気は治りませんか」

「どこかの病院で、そう言われましたか」

「自分で分かります。正直なところ、わたしは先生に、病気を治して下さい、なんて無理なことをお願いに来たのではないんです。ただ痛いときには、注射の一本もしていただけないかと、思ひましてね。」

なに、ご心配には及びません。クスリをやつてくれ、なんて頼んでいるではありませんから。糖尿のせいでしょうナ、足がひどく痛むことがある。

そんな時に先生に診てもらつて、注射でもしていただけないだろうか、こんな虫のいいことを考えてお訪ねしたというわけです」

私は男の頼みに応じることにした。痛いときに面倒を見さえすればいいと言うのだから気楽なものである。しかし、診察を引き受けた本当の理由は、別にあります。

この男はありきたりの言葉ではとうてい言い尽く

すことのできない不思議な魅力を全身に脹らせていた。毎日大勢の人々と顔を合わせてはいるが、こんな人物にお目にかかったことはかつて一度もなかった。できることなら、いつかこの男の話をしみじみと聞いてみたいものだ、と私は密かな期待を抱いたのだった。男は一週間に二度ずつ通院してきました。

幸い腹水は心配したほど増加しなかつたし、足の痛みも小康状態を保っていた。こうしてひと月ばかり過ぎたある日、男から「暇を見て遊びに来ませんか」という誘いを受けたのだった。

「あばら屋ですがね、お茶菓子と炬燵（こたつ）ぐらいはあります。」

先生は陽の当たるまつとうな世間を歩いてきたようですが、たまには変つた話を聞くのも面白いかもしれせんよ」

翌日の夕方、冷たい雨が降りしきる中を男の家を訪ねた。男は炬燵の上に蜜柑（みかん）を山盛りにして私を待っていた。時々、奥の方から雨の音に混じつて、三味線の小さな音が聞こえていた。

「娘がいたずらしているんです」と男は言った。

その夜、私は三時間ほど男の話を聞いた。男は三十分ぐらい話すときたびれるのか、お茶を飲んで一息入れて、「どうぞ、おひとつ」などと蜜柑をすすめて、自分も蜜柑を丁寧に剥いて食べてから、またしわがれた声で少しずつ話を続けた。

こうして私は、三日に一度は男の家に通うことになった。そして一通り聞き終えるころには、冷たい冬はいつのまにか過ぎて、うららかな風の吹きわたる春になっていたのだった。

深川

「親父の従兄弟が東京の深川の石島町で石炭の仲買をやっていた。店の名前は中川石炭店というのでしたが、わたしはそこへ預けられました」。

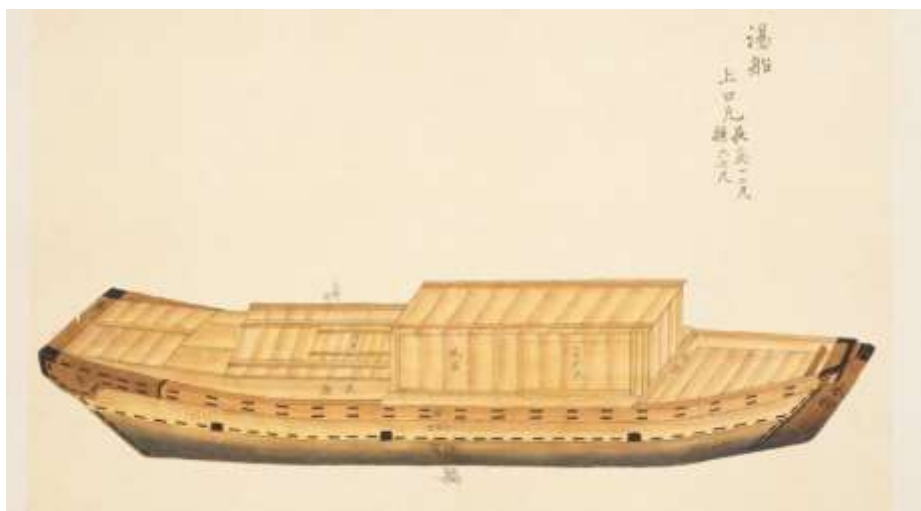
男はちよつと横を向いて、二、三度湿った咳をした。咳が治まると、彼は新聞の広告を裏返して、鉛筆で簡単な地図を書きながら、「石炭屋の前には、こんな具合に、小名木川(運河)というのがありました。すぐそばにお稻荷様があつて、その向こうが扇橋と猿江の橋。川向こうには重願寺が見えて、その近くにはガス会社がありました」。

小名木川を西に向かつてどんどん行くと、隅田川に出る。反対にこっちのほうに、つまり東に下つて行くと、中川に行き着きます。ある時、蒸気船に乗つて小名木川から中川を横切つて江戸川を廻りましてね、流山の運河を通つて利根川を取手まで下つたことがあります。取手の向いに小堀(おおほり)という村がありますが、その船頭たちが客を集めてバクチを開いている。その噂を聞いて、ちよつとのぞいてみようという気になつたというわけです。

この当時、隅田川と利根川には通運丸という蒸気船が走つてました。これは外輪船で、船の両側で大きな水車がガタコンガタコンと回転する。下手な絵ですが、まあ、こんな船だと思えばいいでしょう。

こいつが利根川から霞ヶ浦に入つて、この土浦の港まで通つていた。わたしはこいつに乗つて小堀まで行きましたが、この村は昔からの船大工が沢山住んでいる。船頭も大勢います。案内された賭場は、宿屋なんぞではなくて、高瀬船を改造した湯船(ゆぶ

ね、風呂桶の他、船着場などで、浴場を設け、料金を取つて入浴させる船)というやつです。



国立国会図書館所持デジタル資料「船鑑」より湯舟の図、明治6年写
船後部より火炎口、風呂、戸口(賭場は脱衣所しかない)、7m長2.2m巾

これはもう廃船で、岸につないでありません。中には風呂桶がしつらえてあつて、回りの船頭の家が入りに来る。水は下が利根川ですから不自由はしない。燃料は流木で十分まかなえる。

賭場と風呂場の間には仕切りなんぞありませんか

ら、女も子どもも、目の前で裸になつて湯船に入る。

そうして、男らが丁だ、半だ、と顔を赤くしたり青くしたりして夢中になっているのを、頭に手拭なんぞのせて見物しているんです。わたしもひと風呂浴びさせてもらいましたが、夏ですから障子は開け放しで、利根の川面に月が浮かんでね、そりゃのんびりしたものでした。男は煙管にきざみ煙草を入れて火をつけると、炭火を見つめながらゆつくりとふかした。煙管を持つ手が微かに震えているので、褐色の雁首が火鉢の上でゆらゆらと揺れ動いた。

叔父は石炭の仲買人としては、かなり大きい仕事をやつてました。事務所の回りには見上げるような石炭の山が何十もありましたが、これは北海道や九州から買いつけたものです。

石炭を運んできた貨物船が横浜へ入ると、人夫が木造船に積み替えて、木造船を何艘ものダルマ船に曳かせて隅田川に入ってくる。そうして万年橋から小名木川を下つて、工場だの商店だのが、ぎつしりと並んでる川筋を通つて会社まで運んでくるんです。中川の店は川岸に五つの棧橋を持っていますが、荷を積んだ船が棧橋に着くと、人夫がこれを担いで、石炭置き場に積み上げておく。

注文があると、船や馬車に積んで注文主の会社まで運搬する。女に会いたくて出てきたんですが、西も東も分からない上にべらぼうに忙しくて、捜していく暇はまったくありませんでした。

浅草博徒一代より

この本の初版が2004年8月1日、12年後の2016年11月7刷目で再販されました。その訳は・

ボブ・ディラン



フォークシンガーで反戦をテーマにした※「風に吹かれて」が世界中で大ヒットとなり、有名になったボブ・ディラン。彼の日本公演武道館へ行った思いが甦ります。家内には不評で「つまらない」。

2003年7月7日、ウォールストリートジャーナル紙に「ボブ・ディランは、ドクター・佐賀の文章を借用したのか？」という見出しの記事が掲載された。

浅草博徒一代は、*Confessions of a Yakuza* ある一人のヤクザの告白というタイトルで英語版が出版されており、ディランは、アルバム「*Love and Theft*」で、詩の種元として使われた、と言われた。

しかし、佐賀氏はディランに対し「使っていたいたとしたら光栄です」と称賛しました。

ディランは当時、フォークからロックに曲調を変えたために、ファンから冷たい視線を浴びていた。

だがディランは、ロックギターを使い通した。

Like a Rolling Stone 転げ落ちいく人生(女)など、彼の詩は、心に訴えかけてくる強烈なインパクトが

あつて、聞いている時はよいが、後で疲れる。

その詩に対して、ノーベル賞が与えられました。

※「風に吹かれて」は、ディランの最高傑作で詩曲ともに、彼のオリジナルです。世界中でヒットしました。ただ、ステージではアドリブの即興が多いため、演奏時間4分を10分近く歌い続けます。

日本人について

ボブ・ディラン(Bob Dylan、1941年5月24日)、アメリカ・ミネソタ州出身のミュージシャン。出生名は、ロバート・アレン・ジマーマン(Robert Allen Zimmerman)だが、後に自ら法律上の本名もボブ・ディランに改名している「ボブ」はロバートの愛称、

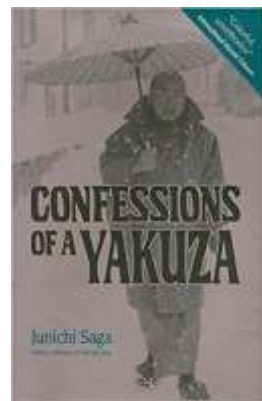
「ディラン」は詩人ディラン・トマスにちなむ。

デビューから半世紀以上経過した現在も第一線で活躍を続ける。2016年ノーベル文学賞を受賞。

「風に吹かれて」「時代は変わる」「ミスター・タンブリン・マン」「ライク・ア・ローリング・ストーン」「見張塔からずつと」「天国への扉」他多数の楽曲により、1962年のレコードデビュー以来半世紀以上にわたり多大なる影響を人々に与えてきた。現在でも、「ネヴァー・エンディング・ツアー」と呼ばれる年間百公演ほどのライブ活動を中心にして活躍している。2017年現在。

グラミー賞やアカデミー賞をはじめ数々の賞を受賞し、ロックの殿堂入りも果たしている。また長年の活動により、2012年に大統領自由勲章を受章している。そのほか、2008年には「卓越した詩の力による作詞がポピュラー・ミュージックとアメリカ文化に大きな影響与えた」としてピューリッツァー賞特

別賞を、2016年10月に歌手としては初めてノーベル文学賞を授与されることが決定。発表からしばらく沈黙を守っていたが、同月28日に授賞を受け入れた。洋楽「レコードファン」



こんな伝承 小堀の舟上山車祭り

取手市小堀(おおほり)は利根川を挟んで飛地となつていますが、常磐線鉄橋が架かる明治29年までは取手市井野村の一部でした。小堀には、江戸時代から豪勢な祭りがあり、近郷に鳴り響いていたことが「利根川図志」に出ています。

「夜に入りて神輿を船にて利根川に浮かべ流れに随つて静かに下る。船には幕を張り鉾(ほこ)を立て、夥(おびただ)しく桃燈(ちようちん)を掛け、笛、太鼓、嘶物(はなしもの)の声高欄(欄干のある舞台)の内に起る、此の時後舟より煙火をあぐ、其の数甚(はな)は)だ多し、之を看(見る)人両岸に雲集し、持連ねたる燈は月の如く水中に倒映して金波銀波を生じ、傍ら涼風に暑さを消し、酒食の興(きよう)を添えて実に此れ地の壯観なり」とある。舟上の「水上山車祭り」の様子が伺えます。

海上渡御(かいじょうとぎよ)というが、神輿を使い山車で行う祭りは少ない。三重県明和町や神奈川県真鶴市の貴船祭が知られています。